

お断り：ここに、この「書き抜き」を掲載する理由は、ボーヴォワールの本『老い』を未だお読みになっていない方に、「子ども」についてご一緒に考える機会のための資料を提供することです。

「子ども」についての手稿は、『老い』の文章が基礎になっています。どうぞ、お楽しみください。
吉田章宏

シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹三吉 訳

『老い：人生の究極的意味』人文書院 下巻／書き抜き／331-374ページ／

ページ／

331／第一部において、年取った人間を、科学、歴史、社会の対象であるかぎりにおいて考察した、すなわち、彼を外から叙述した。しかし、年取った人間は、自己の状況を内面的に把握し、それに反応する主体でもあるのだ。この第二部においては、彼がいかに彼の老いを生きるかを理解しようと試みよう。

情報が、恵まれた階層の人びとによって提供されている／という避けられない欠陥

「しかし、彼らが提供する情報はふつう彼ら個人の場合を越えた広範な意味をもつのである。」

「多様性をつうじて恒常的性格が明らかに示されるので、証言のあるものは年代を考慮することなしに引用、比較することが許されると信じる。」(自由想像変更の考え方を採用している／章宏)

「一部を切りはなしての判断はすべて恣意的となろう。」

333／第五章 老いの発見と受容：身体を経験

「老齢はわれわれを不意に捉える」(ゲーテ)

「各人は自分自身にとって唯一の主体である」

蜀山人「今までは人のことだと思つたにおれが死ぬとはこいつ堪らぬ」(死の不意打ち)

アラゴン「気がつくとおれは老いている」(老いは突然気づかれる)

334／「老いの受容、老いをわが身に引き受けることが、とくに困難なのは、われわれがつねに老いを自分とは関係のない異質のものとみなしてきたからなのだ、――私はいぜんとして私自身であるのに、別の者となってしまったのか？」

「老いという複雑な現実」「老いとは、客観的に決定されるところの私の対他存在(他者から見ての、また他者に対するかぎりにおいての、私という存在)と、それをとおして私が自分自身についてもつ意識とのあいだの弁証法的関係なのである。」

「老いは、当人自身よりも周囲の人びとに、より明瞭にあらわれる。」

「老い」と「疾病」の混同による、いずれかの無視が起こる。

[老くない、病気だ。病気でない、老いだ。]と。

336／「年取った病人は、より若い病人に比べて、医者に診てもらう度数がはるかに少なく、薬の服用量もはるかに少ない。」

病気と気づかず、老いによるもの、と考える。諦めの態度が、過度の心配よりもはるかに多い。自分が無益な存在であるという気持ち。

「健康」――「老い」――「病気」(ガレノスの考え)

「老いは正常に異常な状態なのである」

「老人における正常は、同じ人間の壮年期においては欠陥とみなされたであろう」

「健康への配慮を放棄するとき、彼らは老いのなかに定着するのである」

「彼らは是が非でも自分を若いと考えたい。自分を年取っていると考えるよりは、むしろ健康が悪いと考えるほうを好むのだ。」

337/「人びとは年齢のせいにして病気という考えを払いのけ、病気のせいにして年齢を考えないようにする。彼らはこのごまかしによって、そのいずれをも真剣に考えないですますのである。」

338/ 緩慢な老いの進行によって、気づかないですむ。

急激な変化が平穩を破ることがある。

「われわれの年齢についての啓示が他者たちによってもたされるのは当然である。」

「もし、…一瞬のうちに青年期から老衰期に移ったとすれば、…。あなたは、他人にとってもあなた自身にとっても、あなたではなくなってしまうでしょう。その他人のほうもあなたにとっては同じ他人ではなくなってしまうでしょう…。」(339注)

340/「われわれは近親者を永遠の相の下に見ているので、彼らの老いを発見することもまたわれわれに衝撃をあたえる。」

「他人の眼ざしが彼女を別の者に変身させたのであった…」

「なんという光景だろう。自分もまたそれと同じ光景を他人に見せているわけなのだが！」

341/「時[の経過]がいわば肉眼に見えた、ということである。」

「そうした人びとに生じた変身によって、彼らのうえを通り過ぎた時間をはじめとめ、この時間はまた私のうえをも同じように通り過ぎたのだという啓示に愕然とした」

342/「われわれには自分自身の姿や年齢は見えないのだが、各自、あたかも眼の前の鏡に映る[自分の姿の]ように、他人の姿や年齢は見えるのであった。」

「…、むかしの映画や新聞などでその人達の忘れていたみずみずしさに出会うとき、私は愕然とする。」

「好むと好まざるにかかわらず、われわれは結局は他人の観点に降服する」

「われわれがいぜんとして自分自身であるというところのなかの確信と、われわれの変身という客観的に確実な事柄とのあいだには越えがたい矛盾が存在する。われわれはこの二つのあいだを往ったり来たりするだけで、両方をいっしょにしっかりと把握することはけっしてできないのである。」

老いは、「実感されえないもの」(サルトル)に属する。

343/「老いは私の生にとって一つの『彼岸』であり、私はそれについて十全な内的経験をもつことができない。」

「距離をおいてのみ志向されうるものなのである。」

「われわれは、他者がわれわれについてもつ映像をとおして、自分が何者であるかを心に描こうと試みるのである。」

自分が愛されていると感じている子供の場合

344/「自己認知[あるいは同一化]の危機」

「年取った人間は重大な肉体的変化を経験することなしに、他者をとおして自分を老人だと感じる。」「自分を見ることが不可能」

「われわれの無意識は老いということを知らないのである。それは永遠の若さという幻影を育む。」

この幻影が打撃を受け、自己愛に損傷を受け、鬱病的精神病をひき起こすことがある。345/「老齢が対自の様態において生きられないものであるからこそ、…」

「人は早くから自分が老いていると公言することも、あるいはその逆に、最後まで自分は若いと思ひこむことも可能なのだ。この二つの選択は、それぞれ世界に対するわれわれの総括的な関係をあらわしている。」

「人は自分の職業や人生に疲れると、その生活行動がまだ老齡者のそれではないのに、自分はもう老人だと言う。」

346／「消耗という観念は老いという観念をみちびく」

「この自己盲目が可能なのは、すべて実感されえないものはこう断言するように人を仕向けるからである、『わたしは他の人たちと同じではない。』」

「彼はその人たちを外側からしか見ず、各人が自分自身にとってそうであるところの唯一の存在としてもついろいろな感情を他人には推測しないからだ。」

「他の老婆たちに対するとき、彼女はごく自然に無年齢なのである。自分と老婆たちを同一視するには反省的努力が必要なのだ。彼女がこの自覚に達する際に自分に向かって『お前さん』と呼ぶのは意味深い、すなわち彼女は彼女のなかの他者に語りかけるのである。――この、彼女が他者たちにとってそうであるところの、しかし自分ではいかなる直接的認識ももたない、彼女のなかの他者に。」

347／ジッドの1930年の言葉、「わたくしはいま、わたしがわかかったころ非常に年寄に見えた人たちの年齢になっていると納得するには、たいへんな努力が要る。」

自分に向かって「お前さん」と呼ぶ。「彼女は彼女のなかの他者に語りかけるのである」

「拒否はそれ自身、引き受けの一つの形式なのである」

老齡を根源的な失格と考えるある種の女性は、拒否する。その服装、化粧、身のこなしなどによって他人を欺こうとする。

348／内心の確信と客観的な知識のあいだを往き来する動揺：ジッド「もしもわたしが自分の年齢を絶えず自分に言い聞かせていなければ、きっと自分の年齢など感じないだろう。」

349／「老役の仮装」役柄、衣装とかいう言葉を用いる。「老いの実感不可能性」

「一般には、人は不意を打たれて戸惑い、自分についての映像をふたたび見いだすには、他人を経なければならぬ。人は私をどうみるか？ 私はそれを鏡に尋ねる。答えは不確かである。

350／「… まったくの他人にとっては、それは普通の六〇歳、あるいは七〇歳の人間の顔である。では、われわれ自身にとっては？ 人々はそれぞれ異なった見方でわれわれを見るし、われわれ自身の認識がそのどれかと明確に一致することもないだろう。なるほど、われわれの顔に年取った人間の顔を認める点ではすべての人が一致する。しかし幾年ぶりかでわれわれに再会する人にとっては、われわれの顔は変わったと見え、年月によって害われている。近親者にとってはそれはつねにわれわれの顔である。同一性という印象のほうの変化よりも強く感じられるからだ。まったくの他人にとっては、それは普通の六〇歳、あるいは七〇歳の人間の顔である。では、われわれ自身にとっては？」

「ヴォルテールは自分の外観をきびしく評価しながらも、それを甘受していたのだ、なぜなら、彼は彼の境涯を全体として甘受していたから。」

「文学作品のなかでも、実人生においても、自分の老いを快く思う女性には私は一人も出会ったことがない。」

352／「老いは難破である。」シャトーブリアン

353／ヴァレリー「わたしはひげを剃る時以外は決して鏡を見ないことにしている」老齡の人物が自己について行ったもっとも無慈悲な描写／ミケランジェロ

354／「老齡の画家たちの自画像を考察するのは興味ぶかい。それは彼らが、いよいよ総決算をする

ときにあたって、自分の人生と世界とに対する彼らの関係を自分の顔をとおして表現しているからである。」／

ダ・ヴィンチ、

レンブラト、

ティントレット(サルトルの分析)、

ティツィアーノ、

ポーヴォワールの知る唯一の「はっきりと喜ばしい老人の自画像」はモネの、

「自分の年齢を否認した」ゴヤの七〇歳のときの自画像、五〇歳の男の顔立ちの顔立ちの下に描いた。

355／「実感することのできない老いを生きなければならない」身体において。

356／定年退職した人間、注意を自分の身体に向け、いろいろな病苦を訴える。社会的威信の喪失に由来する苦悩をごまかすために…。

老化現象のもっとも悲痛な点、「もう後戻りはできない、という感情である。病気なら癒るか、少なくともその進行を停止させる可能性がある。事故による不具も、とりかえしがつかず、一年毎にそれがひどくなることをわれわれは知ってるのだ。／この衰退は宿命的であり、誰もまめがれることはできない。」

357／ヴォルテールは、「他人の観点を採用して」、「老いた病人」とか「病める八十翁」と自称した。

358／遺恨の感情によって、悪化させる者もいる。シャトーブリヤン

「老いに対する嫌悪から老いのなかへがむしゃらに突進する態度」(グリブイユ主義)

自分で自分を棄ててかえりみず、ちょっとした努力をも拒む。

敗北を肯じない者にとっては、「老齢であるということは老いと戦うこと」

359／「彼は助けを求めるのを躊躇し、結局、我慢してしまう。」

360／「ある種の心情的ならびに知的に貧しい者だけが、この単調な均衡を受けいれることができる。」

361／もっとも幸福な年齢は、60歳から80歳、「もはや野心をもたず、何事も望まず、自分の蒔いた収穫物を享受する。それは刈り入れを終えた年齢である。」フォントネルの言葉

362／364 スイフトの世間と人生への嫌悪、自分を愛していなかった。

364／ホイットマン「他人の話にはよく耳を傾け、人びとは彼といっしょにいることを喜んだ」

367／ゲーテ、かくしゃくたる若さ、が最晩年は居眠りしていた

トルストイ 旺盛な体力は伝説的であった／努力と配慮の賜物／六七歳で彼は自転車に乗ることを習い…。

369／ルノワール／「画を描くのに手は必要ではない」

370／パピーニ／七〇歳のとき、「学びたい欲望、仕事をしたい欲望でいっぱいだ。」371／「自分の仕事に打ち込んでいない場合でも、自尊心から老衰にたいして精力的に抵抗する者もいる」

ヘミングウェイ『老人と海』／銃の一弾で自分の生命を絶った。

372／一個の人間であるということ了他者たちにも自分自身にも証明したいと念願する。「精神と肉体とは緊密な相関関係にある。」

「アランは、人は可能なことしか欲しない、と言った。しかしこれはいささか単純すぎる合理主義である。老人の深刻な問題[ドラマ]は、きわめてしばしば、彼が欲することをもはや為しえない、という点にあるのだ。」

374／精神主義のこうしたらちもない言説は、大多数の老人がおかれている現実の境涯を考えるならば、無礼というほかはない。その境涯とは、飢えと寒さと疾病であり、…。

「老齡が肉欲からの解放をもたらすという考えは、経験が教えるところと根本的に矛盾している。」

「うらかな老年」は、「各瞬間ごとの勝利、敗北の克服を意味する」

以上、374ページまで